

## 美しき清流は太古の森の雫より

### 第八話：鰻漁の巻き（ユリ花編）

夏休みも真っ最中、連日鮎つりに没頭するチャラ三郎、朝飯食らうと脇見もせず昨日釣り残した場所にまっしぐら今日も朝から入れ掛かりを繰り返すしていた。

ボート場の上に位置するユリ花（通称）は大人でも背の立たない、水流が強い大きなプール状の場所で午後になると川遊びで連日賑わう秋川を代表する川遊びエリアでした。

淵の向こう側は高さ 30M 程の切り立った赤土の壁となっていたが、一箇所だけ横穴ができていた。地元では高学年になると流れを泳ぎきりユリ花の横穴にたどりつけないと一人前とみなされなかったが、チャラ三郎は 1 年生の夏には横穴にある藤吊るにぶら下がり、ターザン紛いに川に飛び込み河童と化していました。



ある日の夕方、ユリ花で友釣りをしていたとき、掛りどころが悪く即死してしまった鮎を曳き舟に入れず、川の中に放置したままにしておき、ものの 5 分も経たないうちの事です。

「あ あ . . . .」

「鮎が、吸い込まれた」

チャラ三郎が見ている目の前で、先ほど放置した鮎が大石の間に吸い込まれるように消えていったのです。

チャラ三郎は一瞬目を疑っていましたが、やはり先ほど放置した鮎の姿がありません。

「淀んでいる場所だけに流されるわけもないし、狐に化かされたのか？」

「不思議なことがあるものだな」

こうなると、鮎釣りどころではありません早速、水中メガネをかけて川底を覗いてみました。すると大石の隙間に鮎のしっぽだけがわづかに見えるでは有りませんか。

息継ぎをしておし、鮎のしっぽの辺りを更に凝視してみると、なんと石と石の隙間から鰻

が鮎を啜えたまま状態で、満足そうにしているではありませんか。

なんと、犯人は鰻でした。

ユリ花の川底には大石がごろごろしていて鮎にとってもこの上ない餌場でもありましたが、鰻や鯰にとっても格好の棲み処でもありました。

あれから十数年経った今でも、「チャラ三郎」は土用になるとは秋川伝統魚法の流し針漁を慣行しています。

流し針漁は鰻の夜行性を利用した漁法で、夕方に仕掛けて朝早くに回収します。

餌のドジョウは田んぼの畦で手づかみにしたものが一番ですが、昨今はスーパーで手軽に手に入ります。



夕暮れ前にポイントに着くと、大石の点在する場所や、芦の茂る影、堰堤周りに仕掛けを沈めます。

翌朝、朝 5 時に起きて仕掛けを確認しに行くと体調 50cm 程の鰻が 1 匹と鯰 2 匹の漁となりました。



秋川の自然の恵みに感謝

「秋川チャラ三郎」